

東密における初地即極説の展開

一 問題の所在

古來、密教の行位論は「豎（^①）」と「横」といった二種の觀點から語られることが多い。「豎」とは、時間の遲速に關わらず、行位の階梯を踏むことが前提とされる解釋であり、「横」とは、平等の觀點に立つて當位をそのまま目的地（到達すべき位）と同等に見る解釋を指す。例せば、東密においては、「十住心論」卷一で「若堅論則乘乘差別、淺深^②。横觀則智智平等、一味^③。」と十住心思想の基底とされ、また異本「即身成佛義」の一つである『眞言宗即身成佛義本書問答』においては「小機者、次第經^④十六生成佛。是豎義也。大機者、即身經^⑤十六生成佛。是横義。所以云^⑥速遲各殊^⑦。」として、機根論に關連

東密における初地即極説の展開（大鹿）

大 鹿 眞 央

する議論がなされている。このように「豎」と「横」といった二種の觀點に基づく行位論は、時代を経るにつれて多様に展開され、複雑な様相を呈することとなる。

東密の行位論において、代表的な敎説とも言える「初地即極説」^⑧とは「初地の悉地と佛果位の悉地を同等に見る」といった「横」の思想を指す。初地即極説は、成佛論や機根論とも相俟つて、鎌倉期以後の論義書や宗義決擇書等で多く俎上に載せられ、後代の東密敎學にも多大な影響を與えている。しかし、この敎説は空海の敎學から直接的に導き出されるものではなく、平安後期に敎相の研鑽が盛んになるにつれて、漸次にその色合いを濃くしていったものと考えられる。もちろん「發心即到」^⑨といった思想も、初期の頃より東密の通底と

して存在していたことは論を俟たないが、平安後期までの行位論に關して言えば、佛果は妙覺位で得るものであり、あくまで十地を経ることが前提とされてきた。「横」とは、佛果を得た後の「佛の觀點」であり、そこに至るまでは、十地を経ることが必要とされてきたのである。換言すれば、東密の教相における矛盾や齟齬に關して考究しようとする氣運が平安後期に高まってくるまで、「横」の思想における「當位」を「初地」に特定し、なおかつそのまま究竟の佛果と同等に見る「根據」について、明確な議論や主張がなされなかったとも言えよう。

しかし、教相研究の隆盛に伴つて、『大日經疏』における初地を基調とした記述⁽⁵⁾や、空海撰述と目されてきた『祕藏記』、『雜問答』等の記述を基址として、初地を重視する傾向が漸次強まっていた結果、初地に自性圓滿の佛果を得るといった特異な行位論が説かれるようになったのである。

本稿では、初地即極説を行位論の基軸に据えるようになった時期を究明するとともに、そういった搖籃期に位置する學匠の初地即極説が如何なる内容を有していたのかを検討していく。

二 『顯密差別問答鈔』の初地即極説

まず初地即極説の概要を知るために、『眞言本母集』(以下、『本母集』)の説を確認する。『本母集』は、南北朝期に輩出した東寺教學の三大學匠、いわゆる東寺の三寶の始めである賴寶(一二七九—一三三〇?)が撰述した宗義決擇書である。そして、これは現存する宗義決擇書で「初地即極」を論題に設けた最古の文獻でもある。以下に『本母集』「初地即極」の段の一部を抜粹する。

問。今宗立^二十地位^一見。爾者、於^二初地位^一窮^二自證覺^一可^レ云耶。

答。爾也。密教意、横平等以爲^レ宗。故地位建立等大異^二餘宗^一。初地淨菩提心位即證^二本初心地^一故。一切究竟內證圓滿、以^二二地已上位^一爲^二內證功德^一施^{モテ}設衆生^二果後方便^一也。

右の文章を見ると、初地位に自證の覺りを窮盡することや、二地以上の階梯は佛果を得た後の方便であることが明示されている。さらに『本母集』の文を以下に引用する。

會云、於「自宗十地」有「淺略・深祕之二義」。淺略門之十地、經「次第」至「第十一地」。(中略)深祕門意、行「初地」開「金剛寶藏」即圓極自證。初地與「十地」無「高下」。初發心時便成正覺等之義也。即金剛頂十六大菩薩生者、是也。(中略)彼淺略十地者、漸次行者所經位、即九種住心分齊也。今所立初地即極者、深祕門十地。祕密莊嚴住心論⁽⁹⁾之。

ここでは、眞言宗における修行の階梯について十地を基準に論じ、その上で淺略門と深祕門の二つの解釋を示している。淺略門の十地とは、一つ一つ漸次次第に階梯を経るものであり、自宗の十地とは言うものの、この行位は前九種住心の分齊であるという。それに對して、深祕門の十地は初地に圓極自證の覺りを得るものであつて、深祕門こそが第十祕密莊嚴住心の分齊であると述べている。また『大日經疏』卷二の「從「初地」即得「入金剛寶藏」⁽¹⁰⁾」の文や、『祕藏記』における「初地與「十地」無「高下」⁽¹¹⁾故」の記述を引證していることにも注目される。

右のような敎説が宗義決擇書、即ち眞言宗の正義を決定することを目的とする文獻において、宗旨とされたことを考え

東密における初地即極説の展開（大鹿）

るに、當時既に宗内で初地即極説が認知されていた狀況が窺えよう。

では、このような初地即極説が主張されるようになった起點はどこに求められるのか。現存する資料において、その最初期に位置するであろう文獻として『顯密差別問答鈔』⁽¹²⁾（以下、『問答鈔』）が挙げられる。この『問答鈔』という文獻は、現在二本が刊行されている。まず『顯密差別問答鈔』という書名で『眞言宗全書』卷二二に收載され、また『顯密差別問答』という書名で『大正藏經』卷七七に收載されている。しかし、ここには撰者の問題が存在する。眞全本では寶生房教尋⁽¹³⁾（一〇六九―一一四一）が撰者と記述されるのに對して、『大正新脩大藏經目錄』では南岳房濟暹（一〇二五―一一一五）が撰者とされているのである。これに關しては、既に堀内規之氏の詳細なる研究⁽¹⁴⁾がある。大正藏本の底本は、奥付に嘉應元年（一六九）書寫とあり、寫本としては最古のものであると考えられるが、選者特定の記述が底本自體に明記されていないため、『大正新脩大藏經目錄』で撰者を濟暹とする根據が不明であると堀内氏は指摘する。さらに、同氏は「文體や思想」から撰者を特定することは困難ではないだろうか。（中略）寫本等に見られる書誌學的考察によつて結論を導き出すことし

ない。」と述べて「撰者をことさら濟邐とする理由は全くなく、(中略) 教尋を撰者とすべきであろう。」と結論している。

ここで『問答鈔』巻上の文章を舉げて、教説の内容を確認することにする。

眞言祕教證^ニ初地時同^ニ究竟妙覺大日位。更無^ニ淺深差降^ニ故。云^レ從^ニ初地得^レ入^ニ金剛寶藏^ニ也。(中略) 夫於^ニ眞言十地^ニ、從^レ本以來有^ニ明昧・淺深^ニ。有^{トハ}三地地遷登^ニ、是地前行相也。雖^ニ轉^{スル}深妙^ス、是修生轉勝。次第深祕故、猶是遮情義也。⁽¹⁵⁾

文章の前半において、いわゆる初地即極説、つまり初地において究竟妙覺大日位と同等の覺りを得るといった思想が窺えることは一目瞭然である。なお、後半には初地以前の行相として、『祕藏記』における「⁽¹⁶⁾地地遷登」の記述も見られる。次に『問答鈔』巻上における興味深い文章を引用する。

眞言行者初得^ニ除蓋障三昧^ニ、開^ニ佛知見^ニ、即與^ニ諸佛菩薩^ニ同等住^{スル}位、是分正覺。非^ニ究竟正覺^ニ。此分正覺、是顯一乘初住位以上功德^{ヨリシテ}生、自行・化他得^ニ不思議自在^ニ。是則

眞言行者中成就悉地分齊也。⁽¹⁷⁾

ここには、本文獻に見られる特色の一つが端的に示されている。それは除蓋障三昧を分の正覺と規定し、眞言行者においては中成就の悉地の分齊と表現する點である。さらに、別所においては、除蓋障三昧について「⁽¹⁸⁾初位得^ニ後位功德^ニ」猶論明昧。是法花等顯一乘教相也」と述べ、除蓋障三昧を法華等の顯の一乘に當てる様子さえも窺える。これらは初地即極説によつて生じた「顯密教判との齟齬」を解消するための處置であると考えられる。

詳論すれば、この除蓋障三昧は『大日經』⁽¹⁹⁾住心品において、初法明道に住する菩薩が不久にして得る三昧と記述され、『大日經疏』巻一において、「然非⁽²⁰⁾究竟妙覺大牟尼位。」と解釋される。そして、その初法明道は、空海撰『十住心論』巻八において「眞言門の初門」と「第八住心天台」に配當されているのである。こういった背景が存在するために、解釋に依つては、除蓋障三昧を媒介にして、密教における初地が第八住心天台の分齊に該當するといった結論になつてしまふ。『問答鈔』では、初地即極説を打ち出したために、除蓋障三昧をそのまま眞言門の初地に配當してしまふわけにもいかず、そ

の會通の策として「分の正覺」・「中成就の悉地」と記述したものと推察できよう。

ここで、平安期東密の教相研究における代表的な諸學匠の教説を概観してみたい。まず般若寺觀賢（八五三～九二五）は、『大日經疏鈔』（般若寺鈔）において法明道を「問。何位爾名眞言行者第十祕密莊嚴住心位也。若配餘教者、等覺位行相耳也。」と説明する様子からも分かるように、初地即極説を採用しない。次に堀池信證（一〇八八～一一四二）も『住心決疑抄』に「眞言宗意、皆立妙覺即身成佛。」等と述べていることから推察できるように、あくまで妙覺位において即身成佛することを念頭に置いている。次に密嚴院覺鏐（一〇九五～一一四三）も『心月輪祕釋』において「淺觀少行、現生登初地焉。深解上勤、即身證極位矣。」と述べて、初地と極位に優劣を設けている。また『五輪九字明祕密釋』においては「轉證次第所經顯然。求覺薩埵、勿永疑慮。非如天台別教有教無人。若不經者、無有是處而已。次第行者必經住心、如下住初地轉中二位。」として、次第の行者における心品轉證を初地から二地へと階梯を上る様子に喩えている。これらのことから、覺鏐が初地の分齊を自證の極位と明確に區別していることが察せられよう。⁽²⁶⁾さらに、光明山寺重譽（一

一一三九～一一四三）は『祕宗教相鈔』卷五に「最初發心者、可立十信發心。」（中略）故今宗意、可立三十五十二位耳。」とあるように、密教の行位に五十二位を立て、最初發心位に十信位を該當させる。重譽の行位論に關しては、大久保良峻氏や田戸大智氏の詳細なる研究があり、田戸氏は「結局のところ、たとえ初地が證位であつたとしても段階的な行位の階梯を踏んでその位に到達することに意義を見出すのである。とはいえ、五十二位に立脚するからには、その初地すらも佛果（妙覺）に比すれば分證の段階にあり、初地即極説のように初地と佛果が等價であると推斷することはできないのである」と結論している。⁽²⁹⁾

以上のように、平安期の東密の學匠たちが揃つて初地即極説を採用しない中、先んじて特異な行位論を打ち出す『問答鈔』は極めて異例な存在であると言えよう。つまり、『問答鈔』大正藏本の嘉應元年（一一六九）という奥付が正しければ、本文獻は初地即極説を明確に打ち出した最初期の文獻であると言えるのである。

それでは、『問答鈔』の撰者は教尋と濟暹のどちらであるのか。前述の如く、堀内氏は「文體や思想」から撰者を特定することは困難」と述べている。しかし、濟暹は『金剛界大儀

軌肝心祕訣抄』卷上において、「金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經」卷上の「成淨菩提心³⁰自他令圓滿³⁰。」という文に關して「此文不^レ謂^レ妙覺佛果焉既圓滿也。依此初地之成菩提力³¹故。後終令^レ自他當^レ到^レ妙覺成菩提³¹云也。」と解説して、妙覺と初地各々の成菩提力に優劣を設けているのが分かる。さらに、これは先行研究の既に論及するところではあるが、濟遍は『兩部曼荼羅對辨抄』卷下においても、『大日經疏』卷二における「然此經宗、從^レ初地³²即得^レ入金剛寶藏³²」の文に關して「是金剛寶藏之名不^レ謂^レ必果地名號³²也。眞言門佛菩薩所證常住不壞極理名云³³金剛寶藏³³故、初地菩薩亦分³³證此理³³云也。」として、初地分證の理解を示している。

先ほど確認したように、『問答鈔』は初地即極説を明確に打ち出している。つまり、初地即極説という觀點に依つて考察すれば、濟遍が撰者とは認められないと結論することが出来るのである。

しかし、教尋撰述と認定するのにも、實は一抹の疑問が残っている。というのも、教尋に密教を學んだとされる覺鑒は、前述の如く初地即極説を採らず、さらに、『興教大師全集』所收の覺鑒の著作中に『問答鈔』の文章は一文も引用されていないのである。『問答鈔』が他の著作に登場するのは、賴瑜（一

二二六—一三〇四）の『大日經疏指心鈔』卷一二に「古德義寶生³⁴云³⁴」として引用されるまで待たなくてはならない。教尋は、『五輪九字明祕密釋』卷末の跋文において、覺鑒に夢告する記述が見られるほど近い閒柄であつた。さらに、覺鑒の談義を門弟の聖應が筆記した『覺鑒上人傳法會談義打聞集』においては、覺鑒が教尋の教説を支持する文章も散見する³⁶。師僧の打ち出した特異な教説を、その弟子たる者が默殺するであろうか。とはいえ、教尋の著作で他に確認できるものは、現在のところ『眞言教主問答抄』³⁷のみであり、そこに行位論は説かれていない。故に、教尋の行位論を精査することは不可能であり、一抹の疑問は残るものの、今は暫定的に教尋を撰者とすることにする。

三 道範の初地即極説

平安後期の東密の學匠たちが揃つて初地即極説を採用しない中、先んじて初地即極説を明確に打ち出した『問答鈔』は極めて特異な存在である。しかし、『問答鈔』における行位論は、教尋の弟子である覺鑒には繼承されなかつた。このような状況の中、初地即極説を基軸に据えて行位を語る學匠が高野山に現れる。それが正智院道範（一一七八?—一二五二）で

ある。

管見の限りではあるが、「初地即極」といった語句は、道範撰『大日經疏通明鈔』（以下、『通明鈔』）の中に「初地即極・地上無惑、是實證義。地上有惑・地地遷登、教門義也。」⁽³⁹⁾と見えるのが初出のようである。道範の初地即極説の特徴は、右の文に見えるように「教門・實行（實證）」の區分を用いる點である。教門とは「教説の上での解釋」という意味であり、實行とは「現實に行う修行」と換言できよう。道範は『通明鈔』の中で「教門・實行」の區分を用いた十地の解釋を記している。一例として、以下に卷一の文章を擧げる。

則雖十地菩薩等者、一云、顯家十地。一云、自家修生十地^云。但自家修生十地者、但是教門^{謂也}。自家十地、皆本有無始故無實行^因人。初地頓證。二地以上、爲果後化他^也。況餘生死中人者、地前二乘凡夫等也。十地以前、皆名^二生死^一故生死者、分段生死⁽⁴⁰⁾也。

右の文章を讀むと、教門に約せば、行位は修生の十地と呼ばれ、次第に經るべき階梯が存在する。それに對して、實行に約せば、行位は本有の十地と呼ばれ、顯密一切の分證・階

東密における初地即極説の展開（大鹿）

梯は存在しないとされるのである。そして、密教は初地に頓證するが故に、二地已上の修行は果後の化他（佛果を得た後の方便）と位置づけられ、初地已上に因人は存在しないと説くのである。

以上のように「教門・實行」の區分を用いて初地即極説を立てることは、實は道範の創意ではない。この解釋が師僧の禪林寺靜遍から受け繼いだものであると告白しているのが、道範撰『貞應抄』卷上における次の文章である。

次成^二義^一者、凡眞言所立^二地前地上位^一有^二教門・實行^一二義。若就實行^一者、顯密一切位次都無分證^二梯橙^一之階級。一切行者、於一切教^一發心學行之間、各其心住^二彼理^一時、諸佛驚覺。驚覺入^二一切智智自證位^一。此直入位^二者、即自家本有本初^一初地也。此外更無昇進^二階次^一。一切萬德頓證・頓滿^{スル}故。次教門者、此自證圓滿萬德^ヲ堅^ニ他時、四十二地階次不同^{アリ}。於此教門、顯密寄齊^{シテ}隨義其說多途^{アリ}。（中略）已上禪林上綱、指授而已⁽⁴¹⁾。

右の文章は「問。顯略一道・極無二心、於自家地前・地上在何位耶。答。古來無定。先哲有諍。今先出異解、

後成「義」から始まる「一道極無地前地上事」の段における「成「義」者」の箇所、つまり道範自身の解釋を示した文章である。ここでも「教門・實行」の區分を用いた初地即極說が明示されている。文章を見ると、教門に約せば、四十二位の階梯が存在するが、實行の觀點に立てば、密教の修行を行つた時點で一切の分證の階梯がなくなることが論說されている。さらに重要なのは、文末の「已上禪林上綱、指授而已」という記述である。この記述により、道範の初地即極說が、師僧である禪林寺靜遍（一一六六—一二二四）の思想を相承したものであることが判明するのである。

次節では、禪林寺靜遍の口決を道範が筆記した『辯顯密二教論手鏡鈔』（以下、『手鏡鈔』）に基づき、靜遍の初地即極說を検討することにする。

四 靜遍の初地即極說

道範の師僧である禪林寺靜遍は、池大納言平頼盛の子として誕生し、第十八代醍醐寺座主である勝賢（一一三八—一九六）や仁和寺上乘院仁隆（一一四四—一二〇五）より眞言密教を學んだ。その後、第二十五代醍醐寺座主にして勝賢の甥でもある成賢（一二二一—一二三三）や、勝賢の實弟であり高野山

蓮華三昧院において淨土教に傾倒したことで知られる明遍（一一四二—一二二四）らと交誼を結んだ。晩年は高野山において道範を始めとする諸學侶に講義・問答を行い、自身は洛東の禪林寺に住持したことにより、禪林寺法印などと呼ばれたといふ。⁽⁴²⁾

道範が靜遍の影響を受けて初地即極說を採用したと記述しているのは、先に見た如くである。以下『手鏡鈔』卷上の文章に依つて、それを檢證していく。

問。於此眞言機有三大・小二機、頓・漸・超不同見。其分別如何。

答。眞言教成佛者、一切皆直修・眞滿・頓極・頓證即身成佛。仍初地以後十六生即無大小・頓漸不同。皆十六三昧同時頓證。而爲果後方便示現十六分漸次顯得之果。是故自證地上、皆頓證・直滿。本有十地・無垢・無惑也。是則初地初發心時、即圓極萬德普門果故。其十地者、即本有無垢也。即初地同時證得之萬德也。依之、地上大小二機・頓漸超者、其實行唯是頓大。漸小、唯是教門。⁽⁴³⁾

冒頭に記すが如く、これは眞言密教の機根に關する問答である。本文において注目すべきは三つある。まず、前半で眞言教の成佛を「一切皆直修・眞滿・頓極・頓證即身成佛」と喝破している點、次に十六生三昧を同時頓證とした上で、敢えて果後の方便のために十六生の漸次顯得の果を示現すると説く點、そして、地上の「大・小」二機や「頓・漸・超」という區分も、實行で言えば頓機・大機のみが存在するのであり、漸機や小機といった機根は、ただ教門に依つて説明したに過ぎないとする點である。

詳論すれば、「大・小」二機や『大日經疏』卷六⁽⁴⁴⁾所説の「頓・漸・超」といった機根の差異は教説の上でのみ存在し、現實の修行では、ただ頓大の機根のみが存在することになる。それ故、眞言密教の修行ならば、全ての行者が頓證し、即身成佛できると主張することが本文の眼目なのである。こうした解釋は、初地即極説を基址と定めたために生まれたものと言えよう。とはいえ、靜遍は教門に約した解釋も重要であると考へていたらしく、密教の機根における相違について以下の如く言及している。

但眞言行者、有三品悉地。是頓・漸・超。上品悉地、密
東密における初地即極説の展開（大鹿）

嚴也。是即身成佛頓機也。中品悉地、十方淨土、是極樂行人。此生不能現證、生三極樂後、頓滿十地。生三極樂即得初地。極樂、是初地土故、得初地後滿佛位。故云超。超地前故。下品悉地、諸天・修羅窟等、是有相眞言機、經萬億劫不入惡道、常在人・天、三密冥資、終成佛果。故云漸機。（中略）
難云、眞言實證意、初地外無別佛地。仍所立未成、如何。答。橫自證、無別佛地。豎利他、有大・小金埵。今且約之。委思之。⁽⁴⁵⁾

右の文章では、「頓・漸・超」の三機に『大日經疏』卷三⁽⁴⁶⁾所説の三品悉地宮の思想を配當して、所到の國土が機根の相異に依つて變わる旨を説明している。上品悉地の密嚴佛國へ到達するのは即身成佛の頓機であり、中品悉地の十方淨土（極樂淨土を含む）へ至るのは超機であり、下品悉地の諸天・修羅宮へ至るのは漸機（有相の眞言行者）とされる。ここで重要なのは、究竟の悉地を得るまでの時間や過程における相違を示す「頓・漸・超」といった機根の區分と、所到の國土の相違とを組み合わせ、新たな教説を生み出している點である。就中、中品悉地の超機の者に關して、「超」とは地上の階梯を

超越するのではなく、地前の階梯を超越するという意味であると論説していることは一目に値する。超機の者は、現生に頓證することが不可能であるため、まず極樂淨土に到達する必要がある。しかし、極樂淨土に到つて初地を得れば、頓に十地・佛位を圓滿することが可能となる。つまり、超機においても、初地即極説が適用されているのである。

實は、教門における「極樂淨土で初地を得た後に、佛果を得る」という思想は、天台圓教と眞言密教における教判の場においても重要な役割を擔っている。靜遍における顯密教判の様子を端的に示す『手鏡鈔』卷上の文章を以下に引用する。

尋言、天台圓教意、實經劫成佛云事、宗之先德有其證乎。

答。私云、禪瑜律師阿彌陀新十疑云、第十云、圓教之意、初發心時便成正覺云。初發心者、即知於〔不〕但中之理也。若爾、何爲更遠過十萬億之佛刹、期往生極樂乎。答。圓教之意言、初發心時便成正覺者、〔理〕理成佛也。今往生極樂之意、非是初心便妙覺之意。往生之後歷若干劫登初地。初地之後更經歷劫數、唱妙覺之成佛也。禪瑜既捨是非宗執顯往生正意之時、

述圓宗實談。成經歷眞義者也。⁽⁴⁷⁾

この文章では、天台圓教が經劫成佛（歷劫成佛）であることの誠證として、比叡山黒谷の禪瑜（九一三？～九九〇）⁽⁴⁸⁾撰『阿彌陀新十疑』⁽⁴⁹⁾を引用している。禪瑜は圓教の意について、「極樂へ往生した後に若干の劫を歷て初地に登り、それから更に劫數を經歷して遂に妙覺成佛が可能となる」と解説している。佐藤哲英氏は、この記述について、「往生は目的ではなく成佛のための手段であるという見方は、千觀の『十願發心記』にも見られたが、禪瑜ではこれが一層明確に示されている」と指摘している。⁽⁵⁰⁾

ここで留意せねばならないのは、禪瑜自身が右の文章の直後に「圓機之凡夫、假使、雖知不但中之理、未至證中之位、猶是輕毛之人也。娑婆之國・五濁之世不可輒取證故、尚欣極樂也」と説明している點である。つまり、これは、まだ證位に至っていない圓機の凡夫、即ち「圓機」と言うとしても最下位の者のみを對象とした文章なのである。こういった文脈を踏まえた上で、靜遍は敢えて「圓教之意」の箇所のみを引用し、天台圓教が實には歷劫成佛であるという自説の根據としたのである。

前掲『問答鈔』では、第八住心天台の成佛を眞言門における中成就の悉地に該當させていた。靜遍も「教門に約せば」と斷つた上で、「極樂淨土で初地を得た後に、佛果を得る」という眞言門の中品悉地と近似した過程を天台圓教の成佛も經ることを説いている。しかし、靜遍は、天台圓教の成佛では初地を得る前に若干の劫を得て、その後さらに劫數を經歷する必要であることを強調することで、眞言門の超機との辨別を圖つたのである。これも初地即極説と顯密教判との整合をとるために生じた解釋であると推察されよう。

このように、靜遍は眞言密教の優位を宣揚するために、天台宗の教理や文獻を援用することがある。⁽⁵²⁾次に、『手鏡鈔』卷上の文章を取り上げて、靜遍が天台教學の「有教無人」の概念を教判に應用する様子を檢證する。

難云、此唯佛與佛境界者、即明^ニ初住分證、不思議三諦理。是於^ニ彼宗猶四十二品中道初門、非^ニ究竟理。然即、今眞言藏家爲^ニ入道初門者、即同^ニ彼分證、如何。

答。今御諭釋意、從^ニ圓初住即入^ニ眞言初門。故二住以上有教無人。爲^ニ顯^ニ此義、以^ニ彼初住分證爲^ニ入眞言門也。彼別教初住（地）入^ニ圓之初住。豈別人於圓作^ニ同

東密における初地即極説の展開（大鹿）

日之想乎。是亦如是。安然云、彼圓人初住分證時、即入^ニ胎藏八葉中臺藏。文 又三部曼荼^{大中年}云、或從^ニ初住入^ニ眞言。文⁽⁵³⁾

これは『辯顯密二教論』に出てくる諭釋の文を解釋した箇所である。ここでは「御諭釋意」として、圓教の初住より即ち眞言の初門に入るために、二住以上は有教無人となると説く。つまり、實證の義に約せば、天台圓教には實行の證果は得られないと説いているのである。それは何故かと言えば、圓教の行者は、聖位である初住に昇らんとする刹那に眞言行に入るが故に、圓教の初住以上は行人無し（有教無人）となるためである。⁽⁵⁴⁾そして、靜遍は自説の根據として、安然（八四一～八八九）、一説九一五没）撰『菩提心義抄』卷二の文と、圓珍（八一四～八九二）撰『三部曼荼⁽⁵⁵⁾』の文を引用している。

ここで留意するべきは『菩提心義抄』と『三部曼荼』の引用の仕方である。原文を確認すると、『菩提心義抄』は「眞言菩薩、初住分證三身入^ニ蓮華藏百界作佛」という文章である。『菩提心義抄』での「眞言菩薩」は廣く「密教の菩薩」を意味するが、『手鏡鈔』ではそれを「圓人」と置き換え、また「三身を證して蓮華藏に入りて百界作佛す」を「胎藏八葉中臺

藏に入る」と讀み換えてゐる。密敎の菩薩が初住に至り、眞言門に入つて成佛するといった圓密一致を眼目とする安然の敎説を、靜遍は「圓人」と置き換え、天台の敎義である「有敎無人」の概念を用いることで、天台では實行の證果が得られないことの引證としたのである。

また『三部曼荼』に關して言へば、原文は「上來住地、分證之義。皆約顯敎修行人説。何以故。顯敎行人、或從初地入此秘密敎、或從初住入此秘密敎。」とあり、「初住より秘密敎に入る」の文が、『手鏡鈔』では「初住より眞言に入る」と換言されているのが見て取れる。ここにもやはり、實證の義では、天台に實行の果は得られぬことを主張する靜遍の意圖が隠されているのである。

さて、初地即極説を基軸に据えた上で、圓敎の初住より眞言の初地に入る義を立てると、圓敎の初住は眞言の佛果と同等であるか否かという問題が生じよう。これに對して、靜遍は『手鏡鈔』卷上で以下の如く解答を示している。

重難云、(中略)眞言即身與天台圓義全同也、如何。

答。中略安然引畢定不畢定入印經、明五種菩薩乘。

一、羊乘行菩薩。二、象乘行菩薩。三、日月神通乘行菩薩。

四、聲聞神通乘行菩薩。五、如來神通乘行菩薩。私用此五、爲前三敎及眞言行菩薩。^文 既以聲聞神通、爲圓。以佛神通、爲眞言佛。其神通用作、非同日論。圓敎與眞言其取證義、豈有相監^(濫)哉⁽³⁸⁾。

右の文章を讀むと、これも安然の敎説⁽³⁹⁾を利用して眞言の優位を示しているのが窺える。靜遍は天台圓敎の成佛も一應認めるが、眞言の即身成佛とは明確に區別する。結論としては、圓敎での成佛を佛果と同等と見るのではなく、あくまで眞言行に入ることが初地即極の要諦とされるのである。

實は、密敎の行位論に「敎門・實行」の區分と「有敎無人」の概念を導入したのは、靜遍が最初ではない。遡ると、既に光明山寺重譽の著作中にその枠組みが見て取れる。次節では、重譽の行位論を概観して、靜遍の敎説との對照を試みることにする。

五 重譽の行位論

重譽の行位論に關しては、既に詳細な先行研究⁽⁴⁰⁾があるため、ここでは『祕宗教相鈔』所説の行位論における要點のみを列挙するに止める。以下に『祕宗教相鈔』卷七の文章を引用す

る。

大日經第一說三璩祇行^二中、以^三初劫^二名證寂然界、以^三第二劫^二名無緣乘心・覺心不生^二。是即顯教分齊也。至^三第三劫^二初^二名眞言門^一。(中略)但初二僧祇、顯教分齊。第三之一劫、是眞言門者、唯是教門之談、非實行之說。若依實行、極鈍漸機者、尙第二劫之初皆入眞言行、更不^レ至顯行究竟。所以全無證顯之究竟^一後、入密之初心^一者也。⁽⁶¹⁾

右の文章を見て分かるように、重譽も「教門・實行」という區分を用いて行位論を展開している。しかし、前述の如く、重譽は初地即極説を採用せず、また「顯教の機根を議論の對象とするか否か」といった點や「密教の修行に入る起點」といった點で靜遍と相違することに留意する必要がある。

詳論すれば、重譽は遼の覺苑(生沒年未詳—一〇七七頃)撰『大日經義釋演密鈔』卷六の説を承けて、「漸入者⁽⁶²⁾從顯入密」と規定している。さらに、重譽は三劫に十住心思想を配當して、「初劫⁽⁶³⁾聲聞・緣覺・證寂然界⁽⁶⁴⁾顯教」、「第二劫⁽⁶⁵⁾無緣乘心・覺心不生心⁽⁶⁶⁾顯教」、「第三劫⁽⁶⁷⁾一道無爲心・極無自性心・

東密における初地即極説の展開(大鹿)

祕密莊嚴心⁽⁶⁸⁾密教」と區分する。しかし、これらの區分は教門の義に約したものであり、實行の義に依れば、「極鈍漸の機根者(漸入者)」は第二劫に到ると同時に眞言行に趣入できると説くのである。つまり、重譽は、「第二劫⁽⁶⁹⁾無緣乘心・覺心不生心⁽⁷⁰⁾顯教」が實行においては密教に趣入してしまうことを説くのである。そして、その根據について「有教無人」の概念を用いて、以下の如く説明する。

次以^二第二劫行^一云有教無人者、初劫行滿、入^二初地心^一、義上既成畢。然今宗心、初地已上、齊是祕密乘行、全無^レ雜餘乘行。以^二虛空無垢心^一名^二初地^一故。而彼無緣乘心・覺心不生之二道、許^二顯教分齊^一而非^二密行^一故、更無^レ其行處。所以知^二唯教門無實行^一。(中略)以^二眞言乘行^一爲^二第三劫^一。雖^二兼治^一三妄、前^二讓^一顯教行^一故也。但依^二此次第者^一、第二劫有教無人也。理實⁽⁷¹⁾初地上行、皆是密行故。⁽⁶⁴⁾

この文章では、初劫の修行が圓滿すれば、初地心に入ることが可能となるため、第二劫における顯教の行人は存在しなくなる旨が述べられている。

前述の如く、靜遍は頓・漸・超の三類を「密教の機根」に限定した上で「教門・實行」の區分を用いていた。教門の義に約せば、天台圓教は初住から眞言に趣入するため「有教無人」となる。實行の義に約して論ずれば、前掲『貞應抄』卷上で「若就實行者、顯密一切位次都無分證梯橙之階級。」と道範に教授し、前掲『手鏡鈔』においては「其實行唯是頓大」と説明していたように、密行を行った時點で密教の機根は頓大・頓證のみとなり、頓・漸・超の差異や一切の分證の階梯は存在しなくなる。それに對して、重譽は頓・漸・超の三類や三劫の階梯を保ったまま「從顯入密」や「有教無人」を説くのである。

結論すれば、靜遍は重譽の説をそのまま用いるのではなく、「教門・實行」や「有教無人」といった枠組み・概念のみを自説に援用して、初地即極説及び教判論を展開したと言えよう。

六 結び

本稿では、まず初地即極説が明確に主張されるようになって起點を検討した。その結果、現存する資料においては、嘉應元年（一一六九）という奥付が正しければ、教尋撰述の可能性が高い『問答鈔』こそが、初地即極説を密教の行位の基軸

に据えた最初期の文獻であろうと結論する。平安後期の東密の學匠たちが揃って初地即極説を採用しない中、これらに先んじて突出した行位論を打ち出す本文獻は極めて特異な存在である。しかし、教尋の弟子である覺鑊は初地即極説を採用せず、また『問答鈔』の文章が他の著作に引用されるのは、頼瑜の『大日經疏指心鈔』まで待たなくてはならない。

次に、初地即極説の搖籃期に位置する學匠、即ち禪林寺靜遍や正智院道範の初地即極説について若干の考察を加えた。靜遍は、光明山寺重譽の行位論を柔軟に採り入れて「教門・實行」の區分や「有教無人」の思想を用いた初地即極説及び教判論を打ち出した。また教門において、「頓・漸・超」の三類における超機の概念に初地即極説を應用し、新たな解釋を見せている點にも一目を要しよう。そして、こういった靜遍の教説を道範が繼承し、道範が使用した「初地即極」という語句を後代の學匠たちが用いて、多様な議論を展開するようになるのである。

なお、教尋と靜遍との關係については、現在のところ不明であると言わざるを得ない。仁和寺系の僧侶である教尋と、醍醐金剛王院系の僧侶と親交の深かった靜遍との間に直接的な繋がりが存在したか否かを文書の上で確認することは非常

に困難である。また靜遍が明確に打ち出した初地即極説の直接的な源流についてどこまで遡及できるのかといった問題に關しても、今後の課題としたい。

注

- (1) 『十住心論』卷一（弘全一・一二八頁～一二九頁）。
- (2) 『眞言宗即身成佛義本書問答』（弘全四・四頁～五頁）。
- (3) 初地即極説に關する先行研究で主なものをつぎに挙げる。
那須政隆『即身成佛義の解説』（二四頁～二五頁）、同『大日經口疏講義』（那須政隆著作全集）六所收、三八五頁～三八六頁、金山穆韶『大日經綱要』（八六頁～八七頁）、金岡秀友『密敎の哲學』（二七六頁～二七七頁）。
- (4) 『發心即到』は空海撰『般若心經祕鍵』（弘全一・五五四頁）所出の語で、主に機根論に用いられる。これに關する代表的な先行研究を以下に挙げる。高井觀海『發心即到』（『眞言敎理の研究』所收）、栗山秀純『眞言宗における『發心即到』について』（『印度學佛敎學研究』二二―二）、大久保良峻『發心即到と自心佛』（『天台學報』五三）。
- (5) 『大日經疏』卷一（大正三九・五八一頁下、『大日經義釋』卷一、續天全、密敎一・九頁下）における「第十一勝迅執金剛者、勝謂大空。大空即是遍一切處。故能起速疾神通也。住此乘者、初發心時即成正覺。不_レ動生死而至涅槃。」

東密における初地即極説の展開（大鹿）

故名勝迅。」といった文章や、『大日經疏』卷二（大正三九・六〇五頁上、『大日經義釋』卷二、續天全、密敎一・六九頁下～七〇頁上）における「然此經宗、從初地即得入金剛寶藏。」の記述等が挙げられる。

- (6) 『祕藏記』（弘全二・三四～三五頁）における「是密敎所謂橫義。初地與十地無高下之故。今聊所難次第義耳。十地自布施波羅蜜至智波羅蜜、地地各有二波羅蜜、是顯敎所說地地遷登之義。」の文章は、初地即極説における最も重要な典據の一つとされる。

- (7) 『雜問答』（弘全四・一七三頁）における「餘敎菩薩、於方便對治道次第漸除心垢、經無量劫乃得至菩提。今眞言門菩薩、自初發心時以眞言爲乘、入菩提心覺心明道時、無數劫功德自然即具足。」の記述も、初地即極説を論ずるときに多く用いられる。

- (8) 『本母集』卷二〇（續眞全二二・六〇頁上～六一頁上）。
- (9) 『本母集』卷二〇（續眞全二二・六六頁上）。
- (10) 前註（5）を參照。
- (11) 前註（6）を參照。
- (12) 大久保良峻『大日經疏指心鈔』と台密（『新義眞言敎學の研究』所收）では、『問答鈔』に初地即極説が明示されている點に觸れている。
- (13) 寶生房敎尋に關する主な先行研究を挙げれば、櫛田良洪『覺鑊敎學と濟暹敎學』（『覺鑊の研究』第二章）、松崎惠水『興敎

大師覺鑒と關係の深い仁和寺の學僧たち」(平安密教の研究」

第三章・第三節)等がある。就中、櫛田氏は『高野山往生傳』における教尋の記述に關して、「すべてを信すべきかどうかは疑問を残している。しかし今日では教尋の傳では最古のものである。(八四頁)」と記している。また、松崎氏は「寶」と「法」の文字の異同にも言及して、金澤文庫藏『大隨求陀羅尼』の奥書にも「法生房教尋上人點本」とあることを指摘している。

- (14) 堀内規之『顯密差別問答』の撰者について(『濟運教學の研究』第三篇第六章)。

- (15) 『問答鈔』卷下(眞全三二・四七頁上、下)。

- (16) 前註(6)を参照。

- (17) 『問答鈔』卷上(眞全三二・二二頁下、二三頁上)。

- (18) 『問答鈔』卷下(眞全三二・四八頁下)。

- (19) 『大日經』卷一(大正一八・一頁下、二頁上)に「祕密主、此菩薩淨菩提心門、名初法明道。菩薩住此修學、不久勤苦、便得除一切蓋障三昧。若得此者則與諸佛・菩薩同等住。(中略)復次祕密主、住此除一切蓋障・菩薩、信解力故、不久勤修、滿足一切佛法。」と見える。

- (20) 『大日經疏』卷一(大正三九・五九〇頁中)、『大日經義釋』卷一、續天全、密教一・三一頁下)における「當知。行人則是位同大覺也。以其自覺心故、便得佛名。然非究竟妙覺大牟尼位。」の記述を如何に解釋するかが、密教の行位論にお

いて重要な課題とされる。

- (21) 『十住心論』卷八(弘全一・三五八頁、三五九頁)には、「祕密主、此菩薩淨菩提心門。名初法明道。釋曰、謂、無相・虛空相及非青非黃等言並是明法身眞如一道無爲之眞理。佛說此、名初法明道。智度名入佛道初門。言佛道者、指金剛界宮大日曼荼羅佛。於諸顯教是究竟理智法身、望眞言門、是則初門。」と記述されている。

- (22) 『大日經疏鈔』卷一(佛全四二・一六頁下)。觀賢は法明道を第十住心の位と認めた上で、餘教で言えは等覺位の行相に當たると説く。大久保良峻「台密の行位論」(『台密教學の研究』第七章・一九五頁、一九六頁)では、この記述にも觸れながら、東密における法明道と除蓋障三昧の解釋について論じている。

- (23) 『住心決疑抄』(大正七七・五一五頁下、五一六頁上)。大久保良峻「台東南密における行位論の交渉」(前掲著・第八章・二二八頁)では、この記述に言及し、初地即極説とは着眼を異にする東密の學匠が存在したことを論じている。

- (24) 『心月輪祕釋』(興全下・一〇三九頁)。

- (25) 『五輪九字明祕密釋』(興全下・一一七〇頁)。

- (26) 覺鑒が初地即極説を採用しない點に關しては、拙稿「覺鑒の教學に見る行位論」(『現代密教』二二)、同「中世東密教學における三劫段解釋―道範における第三劫段解釋を中心に―」(『印度學佛敎研究』六〇―)を参照。なお、覺鑒は初

地即極説を採用しないが、覺鑒撰述と目されている『愛染王講式』（興全下・一二四九頁）には「幸遇『初地即極之教』」という文が見られるため、『愛染王講式』の取り扱いには慎重を期す必要がある。

(27) 『祕宗教相鈔』卷五（大正七七・五九六頁中）。

(28) 大久保良峻「台東兩密における行位論の交渉」（前掲著・第八章）では、重譽が密教に五十二位を立てていたことを論じている。それを承けて、田戸大智「重譽の機根論」（博士論文『東密教學の展開と形成』第七章）では、重譽の行位論及び機根論について詳細な考察がなされている。

(29) 田戸大智「重譽の機根論」（前掲論文・第七章・一〇一頁）。

(30) 『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』卷上（大正一八・三二三頁中）。

(31) 『金剛界大儀軌肝心祕訣抄』卷上（眞全二四・二二頁上）。

(32) 田戸大智「濟暹の密教行位論」（前掲論文・第六章・八四頁）。

(33) 『兩部曼荼羅對辨抄』卷下（大正圖像一・二三八頁上中）。

(34) 『大日經疏指心鈔』卷一二（大正五九・七五一頁下）。

(35) 『五輪九字明祕密釋』（興全下・一一八〇頁）。

(36) 興全上・五〇八頁に「法生房御義。聖御房義爾也」とあり、同五一九頁に「是法生房義也。聖御房同之」とあることから、教導の教説を覺鑒が重要視していた様子が窺われる。なお、文中の「聖御房」とは覺鑒を指す。

(37) 『眞言教主問答抄』（大正七七所收）。これに關して堀内氏

東密における初地即極説の展開（大鹿）

は「石山寺所藏の鎌倉時代建仁元年（一二〇一）の古寫本のみを『大正新脩大藏經』は收録」と述べ、さらに「石山寺所藏の『眞言教主問答抄』も外題のみに「寶生房」と記されていることによって、撰者を教導としているにすぎない。東寺觀智院に所藏されている『眞言教主問答抄』の江戸期寫本二本には、撰者を特定できる記述はされていない」（前掲論文六三三頁）と述べている。

(38) 道範の生涯に關しては、佐藤もな「道範に關する基礎的研究序説―傳記史料を中心として―」（『佛教文化研究論集』七）や山口史恭「道範著『祕密念佛鈔』の批判對象について」（『豐山學報』四五）註一を參照。また佐藤氏の論文では、先行研究を概観するとともに、關連する傳記史料や道範の自著『南海流浪記』を用いて道範の生涯を整理している。

(39) 『遍明鈔』卷一三（續眞全五・三三二頁下～三三三頁上）。なお「初地頓證」の語句は、既に『手鏡鈔』卷上（續眞全一八・三〇三頁下）に見える。

(40) 『遍明鈔』卷一（續眞全五・一〇八頁上）。

(41) 『貞應抄』卷上（大正七七・七〇三頁下）。

(42) 靜遍の生涯に關する主な先行研究としては、櫛田良洪「眞言密教成立過程の研究」（二二三頁～二四頁、石田充之「靜遍僧都の淨土教」（『法然上人門下の淨土教學の研究』下巻、第六篇）等がある。また中村正文「靜遍僧都の信仰の側面について」（『密教學會報』三二）では、父である平賴盛の行狀

にも觸れながら、靜遍の幼少時の境遇について説明している。

(43) 『手鏡鈔』卷上(續頁全一八・二九三頁下)。

(44) 『大日經疏』卷六(大正三九・六四四頁中)、『大日經義釋』卷

五、續天全、密教一・一六七頁下)に「諸衆生有漸入者、有超昇者、有頓入者。然、其所趣、畢竟同歸。」とあり、頓・漸・超の三機の典據とされる。

(45) 『手鏡鈔』卷上(續頁全一八・二九四頁上下)。

(46) 『大日經疏』卷三(大正三九・六〇八頁上)、『大日經義釋』卷二、續天全、密教一・七六頁下)における「此中言悉地宮、有上・中・下。上謂密嚴佛國。出過三界、非二乘所得見聞。中謂十方淨嚴。下謂諸天・修羅宮等。若行者成三品持明仙時、安住如是悉地宮中、當以此此驗觀察。」が、三品悉地宮の典據とされる。

(47) 『手鏡鈔』卷上(續頁全一八・二八〇頁上)。

(48) 禪瑜的行狀・思想に關する主な先行研究を以下に挙げる。
佐藤哲英「禪瑜の阿彌陀新十疑」(『叡山淨土教の研究』研究編)・第三章・第五節)、普賢晃壽「千觀・禪瑜の淨土教思想」(『日本淨土教思想史研究』第二章・第三節)、奈良弘元「禪瑜の往生思想」(『初期叡山淨土教の研究』第三部・第四章)、梯信曉「禪瑜の淨土教思想」(『東洋の思想と宗教』二〇)。

禪瑜の生没年には諸説あるが、『探題次第』の記録によつて良源(九一二・九八五)とほぼ同年輩とみられ、源信・覺運より一世代前の人物と推定されている。また本書の述作年代は不明で

あるが、禪瑜の活躍時期が應和宗論(九六三)の頃より探題補任(九七七)前後であることから、その頃であろうと推察できる。

(49) 『阿彌陀新十疑』佐藤哲英「叡山淨土教の研究」(資料編)・二二六頁・二三七頁)。

(50) 佐藤前掲著・八六頁。

(51) 『阿彌陀新十疑』(二三七頁)。

(52) 『手鏡鈔』の記述を承けて、道範は『祕密念佛鈔』卷下(眞言宗安心全書)下・二五二頁・二五三頁)において「常途念佛の人」と「眞言結縁の人」との差異を決するために、前掲『阿彌陀新十疑』の文章と善導『觀無量壽佛經疏』における「念佛願力乃得往生。到彼華開、方始發」(大正三七・二四九頁中)の文を引用する。そして「此等釋意、往生極樂、只地前信位凡夫。住不退土、更行菩薩行、可成佛也。若眞言門人、本就頓入門故、生彼土、則開自證華臺也」と記して眞言宗の優位を示した後に、「抑彼顯乘經劫成佛者、是教門施設。若言實行、生彼土後廻入眞言門、大日華臺證入。」として、「教門・實行」の區分を用いて結論付けるのである。

(53) 『手鏡鈔』卷上(續頁全一八・二九七頁上)。

(54) 『辯顯密二教論』卷上(弘全一・四八三頁)に、『摩訶止觀』引用直後の解釋として「唯佛與佛・乃能究盡、此宗・他宗以此爲極也。此則顯教關樞。但眞言藏家、以此爲入道初

門。」と見える。

- (55) 道範は『大日經疏』第三劫段における、初地即極説と抵觸する文章に關して、靜遍による「有教無人」の新解釋を應用して問題の解消を圖っている。拙稿「中世東密教學における三劫段解釋―道範における第三劫段解釋を中心に―」（『印度學佛敎學研究』六〇―一）参照。

- (56) 『菩提心義抄』卷二（大正七五・四九一頁上）。

- (57) 『三部曼荼』（佛全二八・一〇七二頁上）。

- (58) 『手鏡鈔』卷上（續眞全一八・三〇二頁上）。

- (59) 『菩提心義抄』卷一（大正七五・四五六頁上）。

- (60) 大久保良峻「台密の機根論に關する一問題」（前掲著・第十三章）、田戸大智「重譽の機根論」（前掲論文・第七章）。

- (61) 『祕宗教相鈔』卷七（大正七七・六二三頁中）。

- (62) 『大日經義釋演密鈔』卷六（續藏一―三七・六四丁左下）。

- (63) 大久保良峻「台密の機根論に關する一問題」（前掲著・第十三章・三三七頁―三三八頁）、田戸大智「重譽の機根論」（前掲論文・第七章・九二頁―九四頁）。

- (64) 『祕宗教相鈔』卷三（大正七七・五八〇頁中―下）。

（キーワード）道範、靜遍、顯密差別問答鈔、辯顯密二敎論手鏡鈔、初地即極

東密における初地即極説の展開（大鹿）